

20) 日本の男子歯科医師の平均寿命は国民全体より長い

The Expectation of Life of Japanese Male Dentists is Longer Than That of Japanese Male Population

日本歯科大学歯学部衛生学教室 ○丹羽源男, 佐藤 勉

歯科医師に限らず、職業病や労働災害が多く発生していることから、職業と健康との関わり合いが密接していることがうかがえる。

職業としての歯科医師の死亡率については、昭和34年度以降の国勢調査年に合わせて集計されている「人口動態職業・産業別統計」で職業別、産業別に調べられているが、全体的に職種がわずかに11種類しか分類されておらず、歯科医師は「専門的・技術的職業従事者（専門職）」に属しているに過ぎず、これらから歯科医療に従事している歯科医師と死亡との関連を調べることは難しい。

私は以前、本学会において日本歯科医師会男性会員を対象とした日本人男性歯科医師の死亡に関する報告を行っており、その中で歯科医師の死亡率を標準化死亡比（SMR）で比較している。その結果、明治生まれの歯科医師の心疾患による死亡割合が約30%で最も多く、ついで悪性新生物が約28%、脳血管疾患約14%、肺炎・気管支炎約10%の順であり、総死因のSMRは国民全体よりも低値であることを報告した。したがって、対象となった明治生まれの男性歯科医師の健康状態は、国民全体に比べて良好であることが考えられる。その

後の調査で、対象集団の平均死亡年齢は75.3歳であり、人口動態統計を基にした25歳以上男性の平均死亡年齢が71.1歳であることから、4歳も低いことがわかり、国民全体よりも長寿であることが証明された。その原因として、調査対象のように健康人をより多く含む影響（healthy worker effect）を受けていることが推測できる。すなわち、歯科医師は、健康に影響を及ぼし得る特異な職場環境で医療に従事するものの、一般に生活水準が高く、かつ医療専門職という立場から自らの健康意識が高いことも関連していると思われる。

今回は、一連の研究で、過去10年における男性歯科医師の平均余命について検討した。すなわち、対象集団は1988年から1999年に日本歯科医師会に属する男性であり、死亡診断書・死体検案書から死亡状況を確認したものを対象とした。

その結果、一般的に平均余命の特定年齢は65歳が用いられることが多いのでそれらの時点の比較したところ、65歳の歯科医師全体の平均余命は、日本人男性の平均（平成7年第18回生命表）よりも高いことが確認できた。